

令和元年度 図書館情報学海外研修助成金報告書

知識情報・図書館学類3年 知識科学専攻

橋本ひとみ

1. 研修概要

研修テーマ：北欧（スウェーデンとフィンランド）における図書館の現状

研修期間：令和元年9月7日～9月12日（6日間）

目的地：スウェーデン（ストックホルム）、フィンランド（ヘルシンキ）

主な訪問先：ストックホルム市立図書館、スウェーデン国立図書館

ヘルシンキ中央図書館、フィンランド国立図書館、ヘルシンキ大学図書館

2. 研修目的

北欧の図書館は子供向けの本や施設が充実しているだけでなく、人々の「コミュニケーションの場」としても確立しているため、日本と比べて図書館と人々の関係が非常に近いといえる。また北欧の教育方法は世界的にも有名であるが、その子供の教育においても幼いころから本が密接に関係していると考えられる。今回は北欧の中でもスウェーデンとフィンランドの図書館に焦点をおいて、人々と図書館の関係性を知るべく研修を行った。

3. 研修内容

〈ストックホルム市立図書館〉

ストックホルム市立図書館はスウェーデン語の図書をほぼ全部取り扱っている図書館であり、中心部にある。本の貸し出しだけでなく Language Café など、言語学習に関してもサポートしている。また両親が休日に子供に向けて読み聞かせをすることはスウェーデンではごく普通のことであり、親子にとって図書館はとても重要な公共施設であると図書館員の方はお話ししていた。

〈スウェーデン国立図書館〉

この図書館はすべての本や雑誌、広告などが収容されている。Research library のため研究者が多く、その人たちからインスピレーションをたくさん受けることができる。子どもの姿は見受けられなかったが、親が読み聞かせを行うことはやはり習慣であり、昔話をよく聞かされていたと利用者の方は話していた。また図書館は安全で本を買わずに読むことができ、かつ友達と会うこともできる素敵な場所であると話してくれた。

〈ヘルシンキ中央図書館/Oodi〉

昨年オープンしたということもあり、とても綺麗な図書館だった。デザイン性とその施設の充実度から、図書館とは思えないような公共施設だった。また立ったまま作業をしたり、

リクライニングチェアに座りながら本を読んでいる人がいたり、利用者は様々で私自身、もっと滞在したくなるようなところだった。またイス一つとっても様々な形があり、利用者ひとりひとりが快適な環境でいられるように考えられていた。現地の人に関わらず観光客も多く訪れて観光地化しているような図書館で新鮮だった。また図書館の中央にカフェが併設されているため、人と話に図書館に来ている人も多く見受けられた。

〈フィンランド国立図書館〉

国立の research library のため研究者にとって重要な施設である。しかしサマータイム期間中は家族連れも訪れるなど、フィンランドでも図書館との関係性が深いことがわかった。またフィンランド人は本が好きな人が多く、サブスクリプションのオーディオブックを契約して、車の運転時や庭の手入れ時に聞いている人もいと副館長の方がおっしゃっていた。また図書館は常に進化し続けるもので、人々にとって必要不可欠なものであるとも話していた。

〈ヘルシンキ大学図書館〉

大学図書館ではあるものの、日本の大学図書館とは異なり ID なしで誰でも入館することができる。ヘルシンキ中心部にあるので大学生以外の一般の人も多く見られた。1 階にはカフェが併設されており、誰でもウェルカムな雰囲気が印象的だった。

4. 研修を経て

どの図書館でも人々との関係が非常に近いように感じた。また子供のための図書が非常に豊富で、かつ親も子供に対して熱心に読み聞かせを行っていたのが非常に印象的だった。そういうところも生活先進国である北欧の余裕さや、教育の充実度を間近で見ることができた。子供専用の部屋があったり、内装が可愛く工夫されているなど、子供が本に興味を持つ工夫が多くあり、日本の図書館にも取り入れたいと思った。

北欧の図書館はまさに人々のコミュニティの中心であり、そこに行けば友達と話すことができたり、本を読めたり、自分の知りたいことを知ることができる、素敵な場所であった。また今回の研修で、日本人の図書館に関する概念も変えていきたいと思った。以前、私が「図書館＝真面目、堅苦しい」というイメージを持っていたように、図書館に対して抵抗がある日本人は少なからずいると思う。だからこそ北欧の図書館の良いところを見習い、日本人に親しまれるような図書館を増やしていきたいと感じた。

5. 終わりに

図書館情報学海外研修助成金でスウェーデンとフィンランドに訪問できたことは、高校生の頃からの夢でもあり、大変貴重な経験をすることができました。このような機会を頂けたことに感謝し、今後もこの学びを活かしていきたいと思います。